

## 「あいさつ」の現在 — 「あいさつ」の発生（4）

● 高橋 六 二

### 1. コミュニケーション文化としての「あいさつ」

私は平成21・22年度の「コミュニケーション文化学演習」（3・4年生対象）で「日本の『あいさつ』文化」というテーマの授業を行った。春学期に「あいさつ」とはなにか、「あいさつ」の変遷、「ことば」による「あいさつ」、「からだ」による「あいさつ」、「もの」による「あいさつ」についてそれぞれ数回ずつの講義をしたあと、秋学期には学生が各自取り組む「あいさつ」の追究をした。その概略を記すと次のとおりである。

「あいさつ」とはなにか

資料一世界大百科事典の「挨拶」

NHK ラジオ第1放送・地球ラジオ「世界のあいさつ」

平成21年1月18日

「あいさつ」の変遷

資料一日本国語大辞典の「挨拶」

朝日新聞 私の0円「魚河岸のあいさつ」平成17年12月1日

「町自慢あいさつ消えた」平成18年5月25日

「あいさつでまちづくり」平成18年9月16日

「勇気を出してこんにちは♪」平成19年1月25日

「どうもだけでいいの？」平成20年1月28日

声「挨拶の大切さ小4に教わる」平成20年4月16日

雄略記 葛城一言主大神との問答譚

伊勢物語 東下り

後拾遺和歌集（恋のコミュニケーション ニシキギ）

禅の「挨拶」

歌舞伎「幼稚子敵討」

柳田國男『妖怪談義』 修道社

「ことば」による「あいさつ」

朝日新聞 検索のツボ「あいさつ文を練る」平成20年2月16日

「おぼんです 敬語形の豊かな大人語」平成20年11月30日

「八丈語? 世界2500言語消滅危機」平成21年2月20日夕刊

「さようならの不思議」平成21年3月8日

柳田國男『毎日の言葉』 創元社

文化庁編『あいさつと言葉』 大蔵省印刷局

藤原与一『あいさつことばの世界』 武蔵野書院

奥山益朗『あいさつ語辞典』 新装普及版 東京堂出版

塩月弥栄子『上品な話し方』 智恵の森文庫

丸谷才一『挨拶はたいへんだ』 朝日文庫

森山卓郎『コミュニケーションの日本語』 岩波ジュニア新書

金原亭世之介『なんで挨拶しなきゃいけないんですかあ〜』 三五館

川村裕子『王朝の恋の手紙たち』 角川選書

竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』 ちくま新書

「からだ」による「あいさつ」

資料一日本語大シソーラス(類語検索大辞典)の「からだ」「顔」「目」「口」「手」「指」「腕」「足」

朝日新聞「あいさつは型より心」平成18年12月28日

「お辞儀して首も鍛錬」平成20年2月16日

(心体観測) 矢田部英正「日本人の身体⑨」 正座が「伝統」になったのは 平成20年11月30日

NHK ラジオ第1放送・地球ラジオ 平成21年6月29日

「しぐさで誤解されたことはありますか」

「もの」による「あいさつ」

資料一世界大百科事典の「祝儀」「熨斗」「水引」「贈物」「中元」「歳暮」

VTR「祝の心を結ぶー加賀水引」NHK総合テレビ 平成10年

1月3日

DVD「水引の町（伊予三島市）」岩波映画

齋藤和胡『包む文化と贈る文化』清流出版

資料として『世界大百科事典』等、辞典類の記述をしばしば使ったのは、それぞれの事項についての理解を基礎的・総合的にしておきたかったからである。また朝日新聞の記事は、この科目の担当とテーマが決まった時から折に触れて切り抜いておいたもので、社会的現象を把握しておきたかったためである。古典や一般書の場合は個別の事例を時系列的に知り、それぞれの時点での状況を理解しようとしたからである。ラジオ放送等の視聴覚資料は各用例の具体的なあり方や広がりなどをみておこうとしたためである。

このように進めた講義は、学生たちが日本あるいは日本人の「あいさつ」文化についての一定の基礎知識・共通理解を持てるように、そしてこのあとに自分が選んで取り組むテーマについての話題や視点を提供したいと考えたからである。こちらの意図がどのように受け取られたか、皆がなかなか自分のテーマを決めかねているようすからすると、必ずしもうまくいった導入ではなかったのかもしれない。それでも段階的に作業を進めていった過程の中から、最終的には次のような小論文が提出された。

- Aさん なぜ歳暮を贈るのか
- Bさん 土産とコミュニケーション
- Cさん 手による挨拶の意味するもの
- Dさん 挨拶と心
- Eさん お辞儀—日本人の礼儀作法を考える
- Fさん 神前式—なぜ結婚式はプログラム化されたのか
- Gさん 握手する日本人
- Hさん 室町時代の年玉
- Iさん 指のしぐさによるコミュニケーション
- Jさん ビジネスにおける握手

これらの小論文は10月から1月までの作成作業を経て2月始めに仕上げられた。できあがりには差があるのはいうまでもないことだが、それぞれにせい

ばい取り組んで4000～5000字程度にまとめられている。これだけの分量の小論文を書くのは初めてのことでないかと思われるが、みんなよくまあやりとおしたなあ、というのが読後の正直な感想である。個別の内容に立ち入るのは省略するが、全体でひとつ気づいたことがある。それは全員が取り組んだテーマが、講義で示した「からだ」や「もの」に関係するものばかりで、「ことば」にかかわるものがひとつもなかったことである。細部に「ことば」を取り上げて考察したものはあるのだが、この結果はやはり意外であった。現代の若者の興味が「ことば」よりも、形に表れる「からだ」や「もの」にあるという傾向をひとつ見せていることになるのだろうか。

## 2. 現代「あいさつ」事情

先にあげた講義資料の中には、ややおおげさに言えば現代日本の「あいさつ」事情が現れているものがある。まず朝日新聞の記事からみてみよう。

### 「町自慢あいさつ消えた」(要旨)

秋田県のある町で小学1年生が殺害された事件が、地域のつながりにも影を落としている。町内にはあいさつの励行を呼びかける標語があちこちにあり、小中学生が知らない人にもきちんとあいさつする姿が町の自慢であり、これを大人たちもまねするようになっていた。しかし事件後、小学生は親の車で登下校し、「知らない人には気をつけるように」と教えられるようになった。

この事件そのものはとてもショッキングなことで、かなり長期間にわたってメディアに取り上げられていた。しかし事件の解明よりも、事件から派生した新たな地域の問題にはなんともいたたまれない思いにさせられたものだった。道で出会ったときに知り合いどうしはもちろん、見ず知らずの人とも「あいさつ」を交わす習慣は、所、時、人によって違いはあるが、現在に続いているといえよう。それは「あいさつ」の基本であり、そこにコミュニケーション文化のありようを探ることができるほど重要なことである。この町では事件がきっかけで、「あいさつ」をとおして築いてきた人と人とのつながりが危うくなったというのである。

ところがことはこの町で終わらなかった。「あいさつでまちづくり」の記事

は埼玉県加須市の動きを伝えたものである。相次ぐ児童殺害事件をきっかけに、「あいさつ」のたいせつさを見直してさまざまな推進運動を始めたというものである。「勇気を出してこんにちは♪」の記事は埼玉県所沢市の北秋津小学校の話である。事件との関連ではなく、児童がじょうずにあいさつできない悩みから生まれたくふうのようだ。全児童が考えた心のこもったことばを先生がひとつの歌詞にまとめ、曲に振りも付けてあいさつの歌「まほうのことば」が完成した。子どもたちは楽しく元気に歌っており、今後は地域に広がることを期待している、というのである。

学校教育における「あいさつ」は、戦後、国語の時間で指導に当たり、昭和33年に「道徳」の時間が設けられてからはそこで扱うようになった。そうした変遷を重ねつつ地域との関わりにまで展開してきたのが、これらの新聞記事に見られる動きだといってよいだろう。あいさつの歌「まほうのことば」の歌詞は記事には載っていないが、あいさつのことばを魔法のことばと言ったのだろう。言い得て妙である。どこかで聞いたことのある捉え方だと思いついてみたら、落語家の金原亭世之介の本にあった。

その『なんで挨拶しなきゃいけないんですかぁ～』は「～」の後に顔文字が入って正式な書名になっているが、あいにく手持ちのパソコンでは打ち出せない形なので略した。噺家らしい、ちょっと俗っぽい、それでいて気の利いた書名である。内容はいたってまじめで、勉強とくふうに満ちた、しかもやさしい語り口である。要は「プラス言葉」のパワーをうまく使いこなして人間関係を良好にし、毎日を楽しく暮らそうという主張である。

その第三章は「脳をコントロールする魔法の言葉」と名付けられている。この中に「血行をよくする魔法の言葉」という節があり、「肩こりが治る魔法の言葉」の図解には、

- ① 正面を向いて、両手を上げる。(万歳スタイル)  
脚を軽く開く  
はっきりした口調で、「肩の血液の循環がよくなることを許可する」と宣言。
- ② 肩を回して、3回ほどジャンプしてみましよう。  
ほ～ら、肩こりがなくなった！

とある。これらの「魔法の言葉」とは脳を活性化させる「目的がはっきりしていて、曖昧さのないインパクトのある言葉」ということのようなのだ。こうしたこ

とばのパワーは自分自身を快適にしてくれる「暗証番号」であり、スイッチだ  
というのである。

「おはよう」の挨拶は、声をかけられた相手もそうですが、どうやら言っ  
た本人が「一番気持ちがいい」ようなのです。そして、「今日も一日いい  
日になるぞ」と、自分をリセットしてくれるのも、この気持ちいい「おは  
よう」のひと言なのです。(p.61)

というのが、すでにこの書名の答えになっていたのだろう。

ここにひとつ、地域や学校、そして好ましい暮らし方にかかわる、現代の「あ  
いさつ」事情を見た。いずれも簡単に言ってしまうと、人は今をどう生きたら  
よいのか、という不安状況の中から生じた動きだと言ってよいだろうか。これ  
までのしきたり、慣行だからという理由付けがどんどんと説得力を失って方向  
が定まらないことを自覚しつつ、それでどうするかという模索が繰り返されて  
いるように思われる。

### 3. ごきげんよう

跡見学園の教員になって「ごきげんよう」というあいさつを知った。『跡見  
学園—130年の伝統と創造』(平成17年刊)に、

「ごきげんよう」について

跡見の皆さんがお使いになっている「ごきげんよう」というご挨拶は、  
もと御所で高貴な方達の間で使われていました。朝・昼・晩、いつでもど  
こでも、人とお会いした時も別れる時にも使うことのできる大変便利なお  
挨拶でもあります。花蹊先生が御所に出入りされていた機縁で跡見でも使  
うようになったのです。

私は学生時代、目上の人に「ごきげんよう」と言うだけでは失礼ではな  
いのかと直接李子校長先生におたずねしたところ、「ごきげんよくお過ご  
し下さい」とか「ごきげんよろしゅうございます」というように下に言葉  
を続けるとかえって品位が下がるということでした。

「ごきげんよう」は皇后さまがお上(天皇)へのご挨拶に申し上げるこ  
とばであり、それは今も変わっておりません最高のご挨拶です。ですから  
決して乱暴な調子で言うてはなりません。(板谷春子談)

とある。ここには「ごきげんよう」というあいさつことば、そしてそれが跡見学園のあいさつになっている経緯が語られている。

ところがNHKの大河ドラマ「新選組」を視ていたときのこと、壬生村の主が「ごきげんよう」とあいさつしていたものだから、御所以外でも、そして男も「ごきげんよう」と言うのかと驚いてしまった。もうひとつ、塩月弥栄子の本を読んでいたときにも驚いたことがある。

「ご機嫌よう」はそんなに古くから日本に伝わる挨拶ことばではなく、せいぜい明治末期か、大正の初期ごろから、まず学習院関係者を通して、上流階級に一般化したようです。おそらく英語の「ハウ・アー・ユー」の日本語化でしょう。この便利な英語の挨拶語は、挨拶するほうも、されたほうも、同じことばを繰り返せばよく、時間や場所、また相互の身分の上下関係にも、こだわりなく使えます。「ご機嫌よう」もお互いが同じことばを交わせば用が足ります。

日本のように縦の人間関係のうるさい社会では、目上からの「ご機嫌よう」に、目下が「ご機嫌よう」を返すだけでは、なんとなくしっくりしません。自他ともに目上に対して失礼に感じます。そこで目上の「ご機嫌よう」に対して目下は「ご機嫌よろしゅうございます」と、「ございます」の敬語をつけて、ていねいな気持ちを表現するようになったのでしょう。ただし、電話でも出会ったときにも相手かまわず「ご機嫌よろしゅうございます」と、先に知らない人からいわれるのはいかがなものでしょうか。このことばの前後に何らかのしっかりした相手に対してのアピールがないと妙なものです。

本来、英語の「ハウ・アー・ユー」からの翻訳語である「ご機嫌よう」には「ご機嫌いかが？」の問いかけの心がありますから、先方に対して「ご機嫌よろしゅうございます」と断定するのは、日本語としてすこしコナれていないと思います。「あなたは、ご機嫌よろしゅうございますか。わたくしもお蔭さまで機嫌よくいたしております」の気持ちをこめて表現すべきだと私は常々思っておりますので、最後の語尾は心もち柔らかくいうように心がけております。断定のことばでなく、問いかけの気持ちをこめて――。

「ごきげんよう」は英語の「ハウ・アー・ユー」からの翻訳語？ せいぜい明治末期か、大正の初期ごろから、まず学習院関係者を通して、上流階級に一般化した？ 「ご機嫌よう」には「ご機嫌いかが？」の問いかけの心がある？——ほんとうだろうか。ついでに有吉佐和子『和宮様御留』（講談社文庫）その七には、

フキは、今度はどう言うのか藤の妹の顔を見ると、唇の上に指を当てている。黙っていいのだと安心してしていると、観行院が会釈をして、  
「どうぞようお寝り遊ばされませ。私も今日はほとほと疲れましたよって退らせて頂きます。ご機嫌よう」

「ご機嫌よう」

フキは言ってから、藤の妹の顔を見ると、微笑して肯いている。そうか、この調子で宮さんの真似をしていたらええのやな、とフキは思った。

などと「ご機嫌よう」の例が散見する。こちらは井之口有一『御所ことば』（雄山閣刊）『尼門跡の言語生活の調査研究』（風間書房刊）を参考にしているから、「ご機嫌よう」の使用例は信頼できるかもしれない。

やどの女ぼう、おんな「御きげんよふ。又おくだりに」

これは『東海道中膝栗毛』四編下の、熱田の宿を出発するときの北八・弥次郎へのあいさつである。これを見ただけでも、「ごきげんよう」は明治末期か、大正の初期ごろから上流階級に一般化した翻訳語、ではないことが明らかである。

## おわりに

「あいさつ」をコミュニケーション文化として考えるという企図は、「挨拶」という語の展開を確かめたあと、一足飛びに現代事情を瞥見することになってしまった。発生論としての追究にはほど遠いまだが、故あってひとまずこれで区切りを付けておくことにして機会を待ちたい。